

東日本大震災を乗り越えて、
前に進もうとする三陸の人たちからの
メッセージを届けます。



10月に行われた町の祭りでは、メンバーのネットワークを活かしたイベントを企画。スペイン人シェフを招き、地元産シェウリ貝を活用したパエリアを振る舞った。「山田町ならではの新たな名物を考えるきっかけになれば」とメンバーは語る。

山田町復興コーディネーター協議会
山田町水産商工課内

山田町は6月、全国から公募で選んだ4人で「やまだ復興応援隊」を発足させた。商店街や観光業の復興に民間の視点を生かそうという狙いだ。メンバーの笹山真琴さん、若田謙一さん、服部真理さん、江刺祐一さんは、前職も年齢もさまざま。だが、4人も、「山田町の復興に携わりたい」という志を胸に、移り住んできた。皆より1年先に復興支援の仕事を始めたい若田さんは、「1年半経つても、まだまだ。ここで生きる人たちが少しでも元気になるようなかたち、あるいはひと筋の光でも見つけられたら」と話す。江刺さんは、「日本を何とか元気にしたいと思っています」。

高齢化や人口減少などの課題に挑戦したい。地元の人々が悩んでいるところに、ヨソモノの自分たちが一石を投じられれば」という。とはいえ、チームとして動き始めて半年が過ぎたばかり。「成果という実感はありません。でも、タウン誌の編集者だった経験を生かし、情報を集めたり意見を引き出したりたい」と笹山さん。「やつと状況が見えてきた感じ。求められるレベルは高いが、体当たりでやるだけです」と服部さん。壁にぶつかり、悩みと向き合いながら、前向きに取り組む様子が伺える。皆の目標はひとつ。山田町を元気にするために、チームが力を発揮するのは、これからだ。

元気を支える4人組

やまだ復興応援隊

チーム「ヨソモノ」で
賑わいのあるまちづくりを

